

昭和 6 2 年度

登校拒否児に対するグループアプローチ

～グループでの活動体験を通して対人関係の改善を図る～

川崎市総合教育センター 教育相談Ⅰ研究会議

登校拒否児に対するグループアプローチ

～ グループでの活動体験を通して 対人関係の改善を図る ～

教育相談I研究会議

安谷屋健¹ 鈴木真一² 吉岡節子³

要 約

グループアプローチは昭和61年10月17日からスタートし、昭和62年12月25日までに4期、計25回実施した。その後も継続して行っているが、今次報告は第I期から第IV期までとする。従来、登校拒否児の治療は個人治療を行うことで現実生活場面への適応を図ってきたが、社会集団への適応という問題を考えた場合、小集団における活動体験の積み重ねが彼らの社会性や人間関係のあり方を醸成し、一層の治療効果を高めるのではないかと考え、個人治療に加えてこのグループアプローチを試みたのである。活動していくなかで子どもたちは徐々に心を開いていき、仲間を受け入れたり仲間から受け入れられたりという体験を通して無理なく自分を表現している場面が見られるようになった。

メンバーのうち7名が登校を始めている。再登校ができるようになるまでには個人面接での治療効果もさることながら、本人をとりまく諸環境の改善があったであろうと思われるが、グループアプローチにおける仲間との交流体験も彼らが社会へ適応していくための援助の一つとして、その効果が確かめられた。

キーワード：教育相談、登校拒否、グループアプローチ、対人関係

目 次

はじめに.....	168	
I 登校拒否児に対する		・グループアプローチでの
グループセラピーの意義.....	168	治療方針
登校拒否の治療過程(図)		資料2・グループ活動をふり返って
II グループアプローチのねらい.....	170	ーチェックリスト(例)
III 対象児について.....	170	・所見と考察
IV 活動の原則及び留意点.....	171	資料3・グループ活動の計画 (例)
V 活動のための具体的条件.....	171	・活動具体計画(例)
VI 活動の実際.....	172	資料4・メンバーのグループ参加状況
VII 考察と今後の課題.....	179	
資料1・対象児の心理・		おわりに
性格特性の分析(例)		参考文献・指導助言者

1 川崎市立生田小学校教諭 (主任研修員) 2 川崎市立宮前平中学校教諭 (主任研修員)
3 川崎市立南加瀬中学校教諭 (主任研修員・61年度)

はじめに

従来、当センター（旧川崎市教育研究所）における登校拒否児に対する教育相談は、本人が来所できる場合は主として遊戯療法やカウンセリングを、その保護者にはカウンセリングを通して個人セラピーによって行ってきた。

しかし、来所している事例の中には個人セラピーだけでは治療が十分とは思われない場合もあった。

このようなことは、他の相談臨床報告の中でも指摘されている。

筑波大学学校教育部・教育相談研究分野の共同研究による「登校拒否児に対する治療の構造的展開」では、次のように述べられている。

「筆者らは、それぞれ経験の長短はあれ、教育相談に携わり、登校拒否児を初めとして多くの学校不適応の児童・生徒と接してきたが、いわゆるカウンセリングによる治療の限界を感じさせるような事例にぶつかることが多い。例えば、幼児期よりさまざまな問題をかかえて、中・高校生などいわゆる思春期あるいは青年期に入って登校拒否をする子ども、あるいは幼稚園、小学校から断続的ないしは慢性的に登校拒否の状態を続けている子どもなどは、単なる親や子どもに対するカウンセリングだけではいたずらに治療が長引くばかりかその効果も十分な期待がもてない場合が多い」
—注1

このような指摘については、個々のケースについてももう少し検討を重ねてみたいと思うが、この中で述べられている「幼児期よりさまざまな問題をかかえて思春期に入り登校拒否をする子ども」や「慢性的に登校拒否の状態を続けている子どもたち」には、共通して「学校における対人関係が不十分であり、開かれた対人関係をもてない」という基本的傾向がみられる。

言いかえると、このような子どもたちは自我や社会性の発達に未成熟な面があるため、人とのかわりに自信がもてず、同年齢集団の中で消極的で他者とかわることが不得手な子どもたちとも言える。

従って、社会性の発達を促すための治療的なかわりが必要になってくる。

また、このような子どもばかりでなく、どの子どもにとっても登校を避けて長期間家庭に閉じこもることは、社会性の発達を遅らせ対人関係や集団への不適応をますます強化していくことにもなる。

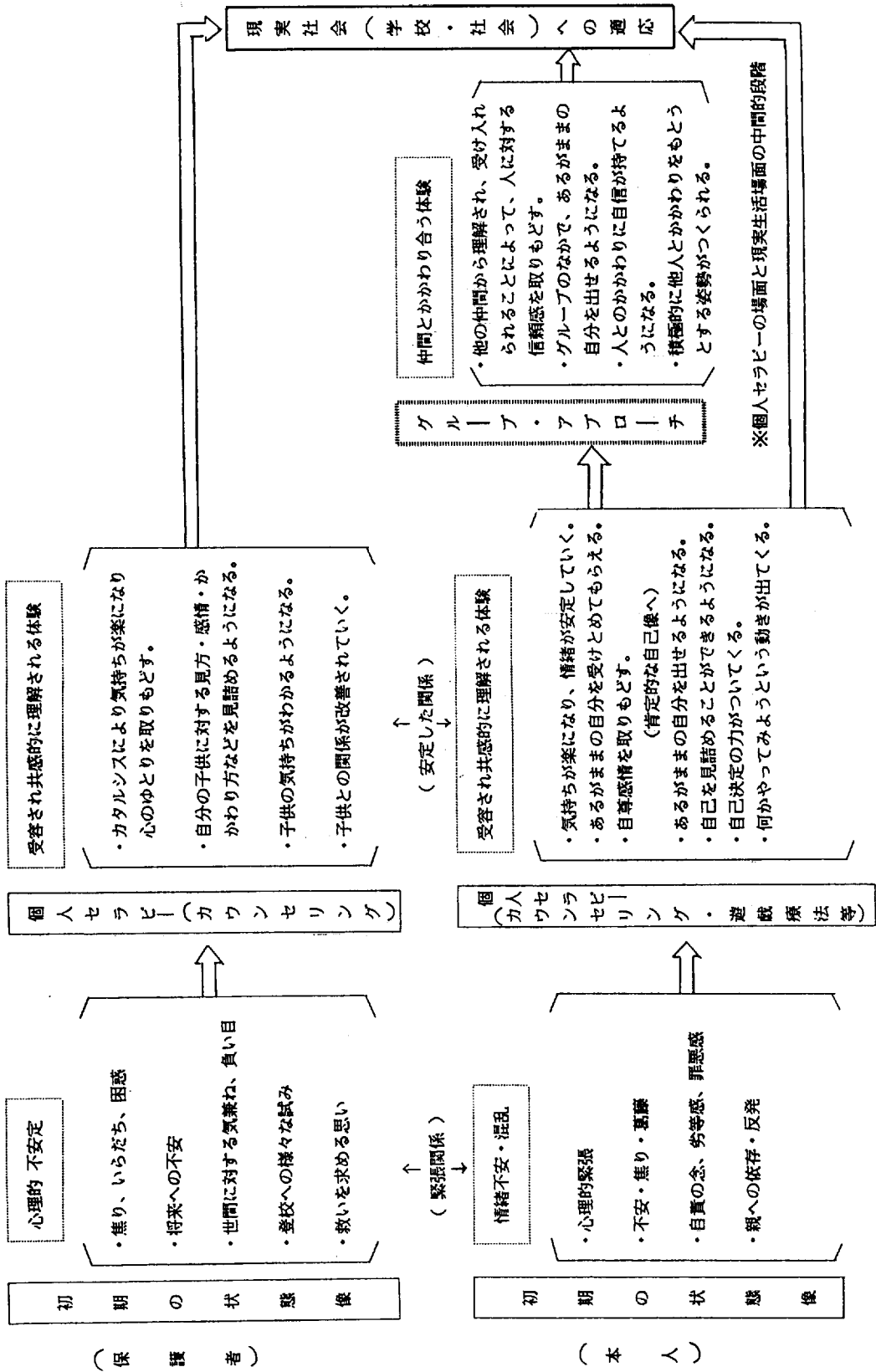
そこで私たちは、同年齢の子どもたちが小集団での活動を通して互にかかわり合い、ふれ合っていくという体験をもつということが一層の治療効果を高めるのではないかと考え、従来の個人セラピーに加えてグループアプローチを試みようとしたのである。

I 登校拒否児に対するグループセラピーの意義

都立教育研究所相談部主任研究員平尾美生子は、登校拒否児に対する集団療法の意義を次のように述べている。

- (1) 登校拒否児は、集団療法に参加すると、相似体験をもつメンバーのなかで、自分だけ悩んでいるのではないという安心感が生まれ、よけいな焦燥感や劣等感が解消される。
- (2) 治療者だけでなく、他のメンバーにも十分理解されることによって人に対する信頼感を増し、友人や仲間づくりの体験をもつことができる。
- (3) 自分が他のメンバーに対して役立ちうるという経験をもつことにより、自信がついてくるし、

登校拒否の治癒過程



また積極的に他人とかかわりをもとうとする姿勢がつけられる。

- (4) 他のメンバーからいろいろ指摘をされたり、多様な刺激を受けることにより自分自身の考え方や対人関係のもち方が明確化され、態度や行動の変化に導かれる契機ともなる。
- (5) メンバーにみられる相互助言や情報交換は、具体的であり現実的なものであるため、各メンバーにとって、それらは受け入れやすく、また役に立つ場合が多い。
- (6) 治療者もメンバーの一員として接することによって、大人や権威に対する抵抗が薄らいでいき教師や親との関係を改善するのに役立つ場合もある。
- (7) 個人治療において、治療者への依存欲求が強くていつまでも分離が不可能な場合、集団療法の経験は他のメンバーとの関係意識を形成し、それが自分自身でものごとを考え行動していくという状況をつくりだしていくことになる。
- (8) 集団療法は、個人療法による治療の仕上げという意味をもち、家庭から学校集団や社会生活へとびこんでいく橋渡しの機能をもつ。(集団療法は個人療法の場面と現実生活場面の中間的な段階ともなり得る)―注2

これは、高校生で構成されたグループによる集団療法の経験から明確にされた意義であるが、当センターで試みている中学生グループによるグループアプローチにおいても治療効果が十分期待できる内容をいくつも含んでいるのではないかと思われる。

Ⅱ グループアプローチのねらい

個人セラピーのなかで治療者との関係がとれ、ある程度情緒的に安定し、治療者に対して自己を表現できると思われる登校拒否児による小集団を編成し、小集団での共同の活動体験を通して対人関係の学習や適応の経験を積むことによって、学校や社会の現実場面への望ましい適応が実現できるようにする。

Ⅲ 対象児について

1. 対象児の選定

心因性の登校拒否児と思われる子どもで、当教育センターへ来所している生徒のうち個人治療を通して以下の条件が満たされ、親担当、子担当、グループ担当者が承認した者を対象とする。

(1) 選定条件

- ① 来所意欲があり、一人で来所できる
- ② 治療者とのラポートがとれている
- ③ ある程度心理的に安定している
 - ・自分の感情をある程度言葉で表現できる
 - ・ある程度自発的な動きができる
- ④ グループ参加の意志があり、他者とかかわりが可能である

2. 対象児の心理・性格特性の分析とグループアプローチでの治療方針

(1) 対象児の心理・性格特性の分析

親担当及び子担当から対象児個々についての情報を得て、その状態像をとらえる。

(2) グループアプローチでの治療方針(目標)

対象児個々の状態像をとらえ、グループアプローチでの治療方針(目標)をたてる。

※ (1)、(2)は資料1を参照

Ⅳ 活動の原則及び留意点

1. 活動の原則

- (1) だれでも容易に活動することができ、人と人とのかかわりの中で関係が密にできるような活動内容にする。
 - ・ゲーム ・ものづくり ・劇 ・話し合い ・スポーツ ・調理 ・音楽 ・その他
- (2) 「共同製作」を通して他者とのかかわりで動いていることの確かめ合いや、共同で完成させたことの喜びや満足感、成就感を味わわせる。
- (3) 可能な限り、ロールプレイ等の演習を通した人間関係づくりを取り入れる。
- (4) 一期ごとの活動の流れは、「出会い」―「ひろがり」―「まとめ」というかたちを基本とする。

「出会い」は知り合い理解し合う段階

「ひろがり」は他者との関係をひろげる段階

「まとめ」は、自分たちで何かをやるう、一つのものにみんなで取りくもうという段階

2. 活動の留意点

- (1) 自由でのびのびとした雰囲気の中で活動できるように配慮する。
- (2) 自分で考えてやってみようという動機づくり、雰囲気づくりに配慮する。
- (3) イメージをわかすことのできるようなやさしい内容をとり入れる。
- (4) 自分の感情が表現しやすいように一度メモをとらせるなど、配慮する。
- (5) かけがえのない一人一人として尊重されていることをグループ体験の過程を通して確かめ合わせる。

Ⅴ 活動のための具体的条件

1. 期 間

学期ごとに第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期……と区分し、一期ごとに終了の形態とする。

2. グループの編成

- ・グループはクローズドグループとし、原則として途中からの参加は認めない。
- ・成員は原則として7～8人程度とし、同年齢に近い集団で編成する。
- ・新たな対象児については一期ごとに候補者を募り、担当者間で検討して参加させる。

3. 活動の場所

原則として作業能力検査室に固定する。製作活動が容易にできることと、場所を固定することで子どもたちは自分たちがいてもいい場所、自由にふるまえる場所であるという安心感がもてるのではないかと考えた。

活動の内容によっては家庭科研修室、音楽研修室、各プレイルーム等への移動も考えられる。

4. 時 間

- ・原則として隔週の金曜日(9:30～11:00)……活動内容によっては若干の延長、弁当持参もあり得る。

5. 担 当 者

- ・昭和61年度 指導主事3名、主任研修員2名
- ・昭和62年度 指導主事1名、主任研修員2名

- ※ 指導主事は個々の子どもを観察し、フォローする。主任研修員は実際の運営、推進にあたる。
6. 記録 — グループ活動のふり返り（チェックリスト）

グループ活動のふり返り表（チェックリスト）に感情表出の度合いを記録させ、そのチェック表に基づいて個々の子どもの感情の動きをとらえる（必要によってフォローする） ※資料2を参照

VI 活動の実際

グループアプローチは昭和61年10月からスタートした。昭和62年12月までに4期、合計25回の活動を実施した。一期ごとの期間は以下の通りである。

- ・第Ⅰ期 昭和61年10月17日～昭和61年12月26日 計6回
- ・第Ⅱ期 昭和62年 2月 6日～昭和62年 3月17日 計4回
- ・第Ⅲ期 昭和62年 5月 1日～昭和62年 7月17日 計7回
- ・第Ⅳ期 昭和62年 9月18日～昭和62年12月25日 計8回

1. グループの編成

相談員（個人担当者）を通して対象児を募ったところ、20名の子どもたちが候補者として挙がってきた。中学生男子7名女子10名、小学生男子1名女子2名である。一人一人の子どもについて検討し、子どもの状態から明らかにグループは無理であろうと思われる子は対象から除いた。小学生については少数であったことと、同年齢に近い集団でないと活動は難しいであろうと判断し除外することにした。結果として中学生男子2名、女子8名の混成グループでスタートした。

一期ごとの参加人数は以下の通りである。

- ・第Ⅰ期 男子2名
女子8名（3月に卒業した者1名を含む。1名は2回目以降参加できなくなる）
- ・第Ⅱ期 第Ⅰ期と同じ成員による編成（新たな参加はなかった）
- ・第Ⅲ期 男子5名（新たに3名が参加する。3月に卒業した者1名を含む）
女子6名（新たな参加はなく、1名が4月から登校を始める）
- ・第Ⅳ期 男子6名（新たに1名が参加する）
女子7名（新たに3名が参加し、Ⅲ期まで継続して参加していた6名の中から2名が登校を始める）

2. 活動の計画

プログラムは、基本的にはグループ担当者が案を立て、活動を進めていった。内容については一期ごとに全体の活動計画を立て、それをもとに一回ごとの具体的な活動内容を吟味し、実践した。

※ 活動の計画は資料3を参照

3. 活動のふり返り

第Ⅰ期

活動の時間が近づくにつれて、グループに参加する子どもたちが一人、また一人と待合室に入ってくる。子どもたちは腰かけたままお互いに無関心を装っている。

活動が始まり、音楽に合わせて動き始める。緊張しているためか、どの子もぎこちない様子でリズムに乗りきれない。H子は動くことができず棒立ちだったのでT(5)が手をひいてフォローする。

車座になって自己紹介ゲームを行う。この頃になると雰囲気にも馴れてきた様子が見られる。それぞれがメモを見ながら自己紹介をしていたが、びっくりするほど自己表現している。

1回目は都合が悪くて参加できなかったM子が2回目から参加する。M子は初めて参加したのに

緊張している様子はなく、以前から知っている仲間のように近くにいるメンバーと電話番号を教え合ったりなど、夢中になって話している。

3回目のフリータイムの頃からインフォーマルな小集団ができ始める。M子を中心にしてK子とY子が加わった三人グループ、N子とH子の二人グループ、K₀子はどちらにもつかずマイペースを維持しながらその場に合わせた行動をしている。T子はリーダー的な存在で、全体に気を配りながら行動していることが多い。

年忘れ会の当日、おやつ作りでもM子はおしゃべりに夢中であまり働こうとしない。出し物では人形劇をやったが、子どもたちはあんなに声が出せるものかと思えるほど役になりきって演技している。ふだん無口でおとなしいN子の「べらんめえ口調」のせりふが印象的である。

<第Ⅰ期をふり返って>

第Ⅰ期は初めてのグループアプローチで、担当者としても不安があった。回を重ねるにつれて、子どもたちには横のつながりが生まれてきた。それぞれが小グループの関係をつくり、そのきずなも徐々に強くなっていく様子が見られる。グループの中で自分の気持ちが出せるようになるまでには時間がかかるかも知れないが、Ⅱ期、Ⅲ期……と続けていくなかで子どもたちの変化が期待できそうである。

第Ⅱ期

新たなメンバーの参加はなく、第Ⅰ期と同じメンバーでスタートした。来所してくる子どもたちの表情は明るく、懐しそうに顔を見合わせている。

共同作業についての話し合いで、M子が劇画「聖闘士星矢」のパロディをやりたいと提案する。K子、Y子がすぐに同調し、彼女たちの勢いに圧倒されるようなムードのなかで決められていった。M子はふり返りの中で

「えっ、本当にいいんですか。うっ、うれしい」

と、その時の気持ちを表現している。自分の提案したことが受け入れられて、余程うれしかったようだ。

3回目はM子が提案した「聖闘士星矢」の映画づくりである。演技が始まると、子どもたちは自分で作った装具を身につけ、恥ずかしさをこらえるように笑みを浮かべながら熱演している。K子はふり返りの中で「恥ずかしいっ、この年をしてこんなことするなんてショックだった」と本音を語っているが、M子に同調して計画を進めてきた立場上やらざるを得なかったのであろう。他の子どもたちもきっとK子と同じ気持ちを抱いていたであろうと思われるが、ビデオ撮りが終わった後は、どの子の顔にもやり終えた後のすがすがしさが感じられた。

<第Ⅱ期をふり返って>

第Ⅱ期はM子やK子の動きが目立った。M子はグループの中ではよくしゃべり、しゃべることで安定しているように見える。K子はM子の動きに合わせて、同調しながら自分を支えているように見える。Y子も、自分の気持ちを出している様子はあまり見られず、M子とK子に合わせることでグループでの安定を保っているようだ。N子とH子は一緒に行動していることが多い。N子はH子をフォローするかたちで動き、H子はN子に寄りそって動いている。T子はいつもメンバー一人一人の様子をうかがいながら、グループ全体のことを気にして動いている。

H男とT男の関係は、N子とH子関係によく似ている。

H男とT男には、うるさいほどおしゃべりしているM子たちのグループが身勝手に見えるのが、反発するような場面がしばしば見られるようになった。

第Ⅲ期

K₀子が新学期から登校を始めた。3月に入って徐々に学校に行き始め、登校するための心の準備をしていた子である。

O男、M男、I男の三人が新たにグループに参加することになった。早速M子が三人にアプローチしている。「どこの中学なの？」という問いかけが発端で、M子はどんどん質問していく。O男は、最初の頃はげんそうな表情で黙っていたが、M子の話につられて徐々に言葉が出る。M男はM子に圧倒されているようで、うつむいたまま黙っている。I男は緊張している様子で顔をこわばらせ、じっと黙っている。

3回目は多摩川の河川敷で活動した。ゲームとして、二つのチームに別れて「花いちもんめ」をやった。T男が恥ずかしがって女子と手をつなごうとしないので、M子が「はずかしいの？どうってことないじゃん、意識しちゃって」とひやかしている。「花いちもんめ」が終わったところで休憩にした。女子グループはおしゃべりしながらおやつをつまんでいる。男子グループはおやつを食べながら河原へ降りていく。ちょっとした遠足気分解放感にひたっているようだ。

4回目の「成功物語」では、子どもたちの今までの成功体験を語ってもらった。K子は「登校拒否はしているけれど、ここでみんなと知り合えてよかったと思う」と述べている。5回目の活動では、K子は自分で持ってきたレコードをかけたいと言ってプレイヤーにセットしたが、聴きたい曲をなかなか選曲できない。「おかしいなー、でもまあいいや」と呟く。この頃からM子が登校を始めているが、K子はM子と離れてありのままの自分が出せるようになったのではないだろうか。

お別れ会の「食べ物づくり」の活動は、ほとんど子どもたちに任せることにした。笑みを浮かべ和やかな雰囲気の中で楽しそうに調理している。盛りつけや配膳など、子どもたちは気がついたことを進んでやり、自由に自然にふるまっている感じである。

<第Ⅲ期をふり返って>

第Ⅲ期は新たに男子三人が加わり、男女の比率が接近したためか男女間で意見の対立する場面が多く見られるようになった。

T男がM子たちのグループに対して「こいつらー」とか「うるせえー」などと言った時には、K子も負けじと「こいつらー？上級生に向かってー」と言葉を返していた。子どもたちはグループにいても、わだかまりなくごく自然にふるまっているように思える。

第Ⅳ期

新たに男子ではK男が、女子ではS子、J子、H_u子が参加した。男子は6名、女子は7名となり計13名のメンバーでスタートした。K男は落ち着かない様子で、上目づかいに目をキョロキョロさせている。S子やH_u子も表情が固く、緊張している様子が見られる。

女子の中ではK子が中心的な存在となり、活動計画やメンバー相互の人間関係など、グループ全体のことを考えて発言するようになっていく。新しく参加したS子、H_u子にも気を配り、何とかサポートしてあげようとアプローチしている。

J子は2回目から参加した子で、ふり返りで「雰囲気がとても明るくて、早く自分もとけこめるようにしたいです」と述べていたが、この回だけ参加して登校を始めるようになった。S子は4回目のふり返りで「一人で浮いていたのでバカバカしかった……」と述べていたが、この回まで参加して登校を始めた。第Ⅰ期から参加していたY子も今期2回目まで参加して登校するようになった。

5回目の活動からは子どもたちの発案で漫画作りをすることになった。N子とH子は漫画作りの

経験があるらしく、ふだん無口でおとなしい二人が漫画用語をまじえながら説明している。

漫画作りは思ったより大変らしい。グループ活動の限られた時間では不足のようで、女子の活動は主にH u子の家で進められていたようだ。漫画作りがスタートして、H子がグループに参加しなくなった。今まで一緒だったN子がK子、H u子と共に行動するようになったことで、とり残されたような気持ちになったのかも知れない。

おわりの会はみんなで調理をして会食することになった。M男がシャンペンとクラッカーを持参した。M男は、明日は引っ越しで学校も変わると言う。グループも今日が最後となり、別れの気持ちがあったようだ。M男が持ってきたシャンペンやクラッカーの音で賑やかな会食となった。

<第IV期をふり返って>

M子もY子もグループを離れていったことで、K子には自分がグループをまとめていこうという気持ちが芽生えてきた。新たに参加した三人のメンバーに自らアプローチしている場面が見られ、従来から参加しているN子やH子にも声をかけて女子グループをまとめていこうと気を配っている。漫画作りを契機にして、H u子やN子とのきずなが強くなっていった。

H u子はH子が仲間に入れなかったことをとても気にして、その気持ちを子担当に述べている。

男子グループは銘々勝手な行動をしていることが多く、T男がどうにかまとめていこうと努力している。しかし、思うようにいかない様子がしばしば見られ、時々T側で介入することもあった。

最後の会食の時には、座談会のかたちをとり今までのグループ活動について自由に語り合うことを意図したが、子どもたちはそれぞれの話題に夢中で雑談になってしまった。話し合い場面での体験の乏しさを感じたが、今後のグループアプローチでの課題であろう。

4. グループアプローチで見られる子どもの状態像

・K子

「K子は変わった」という印象をどの担当者も抱いている。グループ参加当時は他人の言動が気になり自分らしく動けなかった。また、緊張感が強く、M子と親密な関係を保ちながら安定している様子が見られ、時には人の話を聞かずM子としゃべったり攻撃的な言葉を発したりするK子であった。現在では、他のメンバーや担当者から受け入れられることで安定し、あるがままの自分を出せるようになりつつある。

従来のK子と異なり「もっと他のメンバーと交流したいのだが、できないでいる」と個人セラピーの担当者に話したり、新しく参加してくるメンバーに自分から声をかけたりするなど、他のメンバーともかかわってみようという動きが見られるようになった。女子の中でリーダー的な役割をとるようになり、グループ全体に対してもまとめていこうとする動きが出てきた。

・T男

グループ活動の日を待ち望んでいるようでいつも早朝から来所し、他のメンバーが来るのを待っている。他のメンバーと遊びを通して交流することを求めているようで、その面では十分満たされているように思われる。グループ活動を離れると中心的な立場で他のメンバーをリードしているという情報もあり、心理的に安定してきた様子がうかがえる。勝手な行動が目につく男子グループの中で、みんなをまとめていこうとする気持ちがあり、T男の成長の一端がうかがえる。

・T子

グループ活動では無理なくあるがままの自分を出せたのではないかと思われる。担当者だけでなく、他のメンバーにも十分理解されることによって人に対する信頼感を増し、友人や仲間

づくりの体験をもつことができたようだ。そして、自分が他のメンバーに対し役立ちうという経験から自信が生まれ、積極的に他者とかがわろうとする姿勢がつけられてきたように思う。

現在は定時制高校で意欲的に活動している。

・N子

あまり自分を出さないN子にとっては「黙っていても許される場である」という実感があったため、安心してふるまえたのではないかと思われる。このような人間関係は現実場面ではなかなか体験しにくいものであろう。

担当者ばかりでなく、他の仲間からも受け入れられたことで期待された役割を果たすことができたのではないかと思われる。

漫画作りを契機として、K子やHu子と共に行動することが多くなり、グループ活動の時には三人で声高におしゃべりするようになったが、今までのN子には見られなかった姿である。

今まではH子と一緒にすごしていることが多かったが、H子のことをどう受けとめているのか気になるところである。

・H子

グループ活動の場面では自由に自分を表現したり、すすんで人とかがわったりすることは少ないが、N子と同様「黙っていても許される場である」という実感を抱いているようだ。

共同製作の漫画作りがスタートしてからグループに参加しなくなる。今まで一緒だったN子がK子、Hu子と行動を共にしたことでとり残されたような気持ちになったのかも知れない。

個人セラピーの担当者に「グループの人たちとは考え方が違う。私は将来漫画家になりたい。自分なりの漫画をかきたい」と訴えていたそうだ。その後個人セラピーは続いているが、東京のT機関で集団治療をしているという情報を得て、そちらの方へ動き始めている。

・H男

グループに参加する時点から登校を真剣に考えていた子である。自分を洞察できる子で、グループには「自分の気持ちを伝える友だちが欲しい」というしっかりした動機があって参加している。

「グループの中では無理なく自分を出せる」と、子担当者に自分の気持ちを伝えている。あるがままの自分を出しても大丈夫だという実感を抱き、自信を回復しつつあるように思われる。

学級担任に自分の方から電話できるようになり、時々学校の相談室で担任に会っている。担任には以前に比べて話せるようになったが、クラスの仲間には「立場の違い」を感じてまだ接触できないでいるとのことである。

・M子

M子は学校で、自分を思いどおり出して仲間に反感をかい、傷ついて自分を出せなくなってしまった。

「グループの人は学校の人たちと全然ちがう。みんななんでも聞いてくれる」とくり返し語っているように、グループではあるがままの自分が受け入れられたことで同年齢の仲間に対する信頼感をとりもどしたように思われる。

また、グループの中でリーダー的な役割をとって成功したという経験が自信となり、学校という現実生活へ入っていくことができたと思われる。

・Y子

K子がグループに参加するならば自分も参加するという依存的な面が見られたが、グループ

の中では活動内容についての建設的な意見を述べたり、今までの活動に不満を述べたりするなど自分を出すことができるようになってきた。グループ活動を通して徐々に心を開いてきたようである。

10月の中旬から登校を始めるようになった。今まで学校の友だちとはかかわることができなかったY子だが、クラスの友だちが誘いにくると一緒にすごせるようになり、そのことが登校に結びついていったのではなかろうか。

・K子

おとなしくあまり自分を出さない子だが、メンバー一人一人を信頼して誠実にかかわっていたのが印象的である。

個人セラピーでの十分なフォローとあいまって、グループアプローチでの体験が現実場面へ入っていくための力となり得たように思う。

現在は登校しているため経過を観察している。

・I男

劣等感・緊張感が強く、引っ込み思慮な子である。人間関係の体験が乏しいために不適応状態になったのではないかと思われる。当初の様子からグループでの適応はとうてい無理ではないかと思われたが、グループ活動の日は早く来所し、男子メンバーとゲーム等で一緒に遊んでいる。回を重ねるたびに表情も明るくなり、不安感が解消しつつあるようだ。

現在は、パン工場に勤める方向で徐々に動き始めている。

・M男

グループの活動日を楽しみにして、にこにこ満足した様子で参加している。友だちを得た喜びを体全体で表現しているように見える。

母親の話によると

「グループ活動を終えて帰ってくると、表情が明るくとても満足しているようだ」

とのことである。

劣等感が強くまわりの反応に敏感な子であるが、何を言っても大丈夫だという安心感をもち自分らしくふるまえるようになってきた。

第Ⅳ期の「おわりの会」で、「明日は引っ越しの日、学校もかわって1月からは新しい学校に行くんだ」と話していた。

転校後は、現在まで順調に登校している。

・O男

グループのメンバーと一緒に行動できることを楽しみにしている。仲間から受け入れられたことで自信をもつようになり、進んで自分を出すことができる。時々、O男の身勝手と思えるような言動が女子に指摘されることもあるが、ごく自然なかたちでかわりあっている。

グループに参加して仲間ができたことに満足し、次回のグループ活動を待ち望んでいる。

・Ta子

Ta子は第Ⅰ期の1回目のグループ活動だけ参加して、2回目から参加できなくなった。初めてのグループ活動の日、まわりがびっくりするほど自己表現していたのはとても無理をしていたのではないかと思われる。無理をして不安を抱き、自信がもてなくなってしまったようだ。

個人セラピーの日に、たまたまK子やM子と顔を合わせたそうだが、子担当者に「いろいろ聞かれたけれど黙っていた。すごくいやだった」と、その時の気持ちを語っている。

グループに参加したいという気持ちはあるようだが、まだ誰とでもコミュニケーションがとれるという段階には至っていないようである。

・K男

自分と同じ悩みをもっている人と話したいと個人セラピーの担当者に話し、グループに参加した。子担当者の情報だと「いじめ」がきっかけで学校へ行かなくなり、カウンセリングのなかで人が憎い、人に会いたくない、人がこわくなってしまったと訴えていたという。

グループに参加して他のメンバーと楽しそうにゲームをしたりなど、とけこんでいる様子が見られる。漫画作りでは「どんなもの、話にしたいの?」と、ぼそっと重い口を開いた。気持ちにゆとりが出てきたように思える場面であった。

K男にとって同年齢に近い仲間から受け入れられた体験は久しぶりのことではなかったろうか。担当者からも受容されることで、自分を出しても大丈夫だという安心感をもったようだ。

1月からは、受験勉強のためグループには参加しないと子担当を通して伝えてきた。

・S子

グループでの活動の様子から、S子は思ったより話の聞ける子で自発的に動ける子だという印象をもった。T側に対しても自分を出すことができるので、受容関係が成立しているように思われる子である。

1月2日、子担当者からS子が登校を始めているという報告があった。グループには継続して参加したいという気持ちを伝えてきたそうだが、以後グループへの参加はない。

・J子

第Ⅳ期の2回目の活動だけ参加して登校を始めたために、次回からはグループに参加しなくなる。長期にわたる登校拒否の状態が続き、保護者が一緒に来所できないJ子であったが、子担当者に

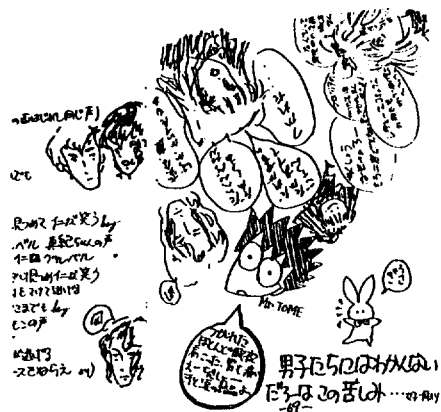
「みんなあんなに話せて、どうして学校へ行けないの?」
と言い残して登校を始めている。

・Hu子

個人セラピーでどんどん自分を語れる子で、グループではK子に依存しているが緊張感はなく、自然に自分を出している場面を多く見かける。グループでは一番の年少者だが、年の開きはあっても他のメンバーと関係がとれる子である。

漫画作りではK子に声をかけ、N子やH子を自宅に誘ったが、H子は断ったようだ。N子のことは「強くて、こわい人」と言っていたが、最後まで行動を共にして漫画を作りあげた。

H子とは共に行動することはなかった。漫画作りが具体的にスタートした頃S子が登校を始めたので、女子グループはK子、N子、H子、Hu子の四人となった。Hu子はH子と一緒に行動しないことを気にして、電話をしてみようか手紙を出してみようかと個人セラピーの担当者に、H子に対する気持ちを述べていたようだ。



VI 考察と今後の課題

子どもたちが心を開き、わだかまりなく自由に自分を出すことができるように、そして他者も受け入れることができるようにグループ活動を進めてきた。

緊張感や自己防衛が強いためなかなか人とかかわりをもてない子どもたちが、同じ悩みをもつ仲間集団との交流によって、自分だけではなかったという安心感が生まれ劣等感や焦燥感が徐々に解消し、情緒的に安定していく様子が見られるようになった。

小集団という必然的に対人関係が要求される場の中で、子どもたちはこのグループアプローチで人間関係を通して人とかかわり方を学習しているように思える。子どもたちは相手やまわりの様子をうかがいながら自分の感情や想いを少しずつ表出し、あるがままの自分を出しても大丈夫だったという感触をもったようだ。互いに受け入れたり受け入れられたりという体験の積み重ねによって信頼関係が生まれ、徐々に自信を回復し他者に対する警戒心も解消しつつあるように思われる。個人治療の中では体験できない集団でのコミュニケーションは、彼らにとって久しく忘れられていた体験ではなからうか。

グループアプローチは個人治療の場面と現実生活場面との中間的な役割をにない、小集団での対人関係のトレーニングは彼らが現実生活場面へとび出していくためのステップとなるのではなからうかということがある程度確かめられたように思う。

しかし、長い間グループに参加している子どもたちの中には馴れ合いが生じてきたような印象をもつ子もあり、時々身勝手と思えるような言動が見られることもあった。彼らの課題がこのグループアプローチを通してどの程度まで解消していけるのか、改めて見直しをしていく必要がある。

○活動内容

子どもたちはグループの中であたたかく見守られ、お膳立てされた計画にそって活動してきたが子どもたちに徐々にイニシアチブをとらせるようにして、自分たちで計画し実践していけるような内容を多く取り入れていきたいと思う。また、人間関係の成長やグループの成長を考慮に入れた内容を吟味し、集団の中での対人関係の葛藤を乗り越えていく体験がもてるようにしていきたい。

内容によっては、継続的に次回まで持ち越されるものもあった。次回の活動日まで長時間かかるために活動意欲が乏しくなるという現象が見られたので意欲が持続できる内容にしていきたい。

○グループの形態

グループは、基本的にはクローズドグループで行ってきた。子どもたちのグループへの所属意識も高まり、メンバー相互の関係も深まっていくのでこの形態を進めていくことが妥当であろうと思われる。

○グループの編成

グループの成員は当初7～8人が限度であろうと考えていたが、結果的にそれを越える状態になった。スタッフの関係で2グループに分けることもできず、止むを得ないという状況である。

○子どものフォロー

グループ活動が終わると、次週の個人治療で子担当者に子どもの想いを聴いてもらったり、フォローしてもらっていた。しかし個人治療の中で、すべてグループのことが語られるとは限らない。また、子担当者の側でもグループに参加していないため、フォローしにくいという面もある。

グループ担当者の方で面接時間を設定し、フォローしていくことも考えられる。また、可能な限り子担当者もグループに参加できるようにしていきたい。

資料1：対象児の心理・性格特性の分析（例）

氏名：T・H（15才男・中2 初回面接：昭和59年8月）

家族構成 生育上の 問題点	父：厳格 母：ずばずばものを言う 兄：情緒障害児（養護学校）
個人治療 の方針	・自分の思いや気持ちを言語化できるので、カウンセリングを主に治療を進める。 ・対人関係で自信を失い自分を出せなくなっているのを、受容的にかかわり自信を回復させる。
本人の 状態像	・情緒混乱が著しく、やり場のない感情を家族にぶつける。担任に会うことも拒否不安感が強く、夜眠れない。夜眠る時の指しゃぶり、円形脱毛症（既往症） ◎グループ参加時は心理的に安定し、外出したり時々体力づくりに励んだりしている。学校の相談室に通い始めるが、担任やクラスの仲間に本音を出せなくなってしまう自分を感じ悩む。
心理・ 性格特性	・YG検査E型 ・情緒不安、神経質傾向、他人の感情に敏感である。
治療過程 での特記 事項 経過症例	・自分のつらい気持ちを話して不安から逃れたいという時期であり、子担当と共に登校のきっかけを探す時期である。体力に自信がなく、きたえようとする時期で学校に行き担任と会ったり様々な試みをする。
登校意欲 を示す 状態像	・不安が薄れてきて、登校のための心の準備をしている。 ◎現在の状態としては、学校の相談室に週3日くらい通っている。登校日数は自分で計画を立て、調整しながら次第に日数をふやしていこうという方向で一步一步進んでいる — 6.2.1.1
考 察	・グループに参加してみたいという意欲を示している。 ◎グループの中で無理なく自分を出せるようになってきており、リーダーとしての役割を果たすようになってきている — 6.2.1.1

・ グループアプローチでの治療方針

自分のことをよく見つけ、常に身の処し方を考えて行動している。グループ活動では自分を出すことができ他のメンバーへの援助もできるので、他の人の役に立てるという体験を通して自信を回復させていきたい。

資料2：グループ活動をふり返ってーチェックリストー(例) 氏名：T・H

・所見と考察

10月17日	<p>神経質になって表情が固い。女子が多いせいとかとまどっている様子が見られた。 T明にはよく話しかけていたが、女子集団に押し出されたような状態だった。人とかがかわれたのは久しぶりの体験だったのではなからうか。</p>
10月28日	<p>T男とのコミュニケーションがとれ、感心するほど面倒をみている。気持ち安定し、リラックスして能率的に仕事を進めている。 黄色の月がきれいに表現できた一紙紙作り</p>
11月14日	<p>表情が明るくなって、T男をリードしている。H男がトイレに入ったら、T男が追いかけて行った一瞬間意識が育っている。 気持ち悪く早く帰りたいと言っていた(今朝、早く起きたそうだがグループの日だという意識が強く働いたのかも知れない)</p>
11月25日	<p>作業が終わって沈黙していたが、やりきって満足し、待っている沈黙である。 音楽会ではボンゴを選んで、満足してたたいている。メンバーに声をかけ、みんなを動かしている。</p>
12月5日	<p>T男が欠席したが、一人でどんな感じだったのだろうか。たびたびうつ向いている様子が見られた。 今日は用事があると言って、自分の思っていることを告げてさっさと帰っていったのは立派である。 ネクタイをしめてきているのだろうか……女の子の存在をどうとらえているので一人で大変だったようだ。</p>
12月26日	<p>今日は寒いコートにブレザー、色物のシャツを着て来所した。年忘れ会ということで改まった気持ちがあったのか……あるいは女子を意識してのことだったのかも知れない。 人形劇ではいきなり台本をわだかまされて緊張したのか、途中で席をはずして練習をしていた。 歌合戦の時、小さい声だがきれいな声で歌って女の子にうけた。気恥ずかしそうにしていたが、にこにこ満足そうにしていた。 おやつ作り、全場の設定に率先して働いていた。</p>

月	日	10/17	10/28	11/14	11/25	12/5	12/26
活動したこと	大変楽しかった 楽しかった どちらとも言えない 楽しくなかった 全然楽しくなかった	●	●	●	●	●	●
活動したこと	大変やさしかった やさしかった どちらとも言えない むずかしかった 大変むずかしかった	●	●	●	●	●	●
他の人との関係	とてもよく聞けた かなり聞こうとした どちらとも言えない あまり聞こうとしなかった ほとんど聞こうとしなかった	●	●	●	●	●	●
私のことば	とてもよく話せた かなり話せた どちらとも言えない あまり話せなかった ほとんど話せなかった	●	●	●	●	●	●
雰囲気づくり	とても気をつかった 多少気をつかった どちらとも言えない あまり気をつかわない ほとんど気をつかわない	●	●	●	●	●	●
思ったこと・感じたこと	つきからは、みんなと話ができるようになりたい。 今年、6回しか活動できなかった、楽しかったです。 次回はもっと話せるようにしたいです。 今日はやること、みんな楽しかったです。 だんだんこめるようになって、うれいです。 今度から少し人に気をつけて、がんばろうと思う。 次回も話せるようにしたいです。	●	●	●	●	●	●

資料3：グループ活動の計画（例）

第I期全体計画

（昭和61年10月17日～12月26日）

月・日	ねらい	主題名	活動の内容
10・17 （金）	グループの雰囲気づくりを通して、和やかな人間関係を体験する	オリエンテーション ・はじめまして ・名札をつくる	1. グループ活動についてのオリエンテーション 2. ウォーミングアップ 3. 自己紹介ゲーム 4. 名札づくり
10・28 （火）	グループの中で気軽に話し合える雰囲気を体験する	・Xさんを紹介します ・表紙を作る	1. ウォーミングアップ 2. パートナーの紹介ゲーム 3. 記録帳の表紙づくり
11・14 （金）	「私について」の問題を真剣に楽しく考える。ふれ合いを通して、その人の人がらを知り合う	・私はあなたに質問します ・所持品箱を作る	1. ウォーミングアップ 2. インタビューゲーム 3. 所持品箱づくり
11・25 （火）	相手を受け入れることや協力し合うことの大切さに気づく	・所持品箱を作る ・みんなのできるスポーツ	1. ウォーミングアップ 2. 所持品箱づくり 3. スポーツの会の計画（合奏の会の練習と演奏）
12・5 （金）	役割を分担し合いながら、グループの人間関係をより親密で和やかにする	・劇の演出 ・年忘れ会を成功させよう	1. ウォーミングアップ 2. 劇を演じよう 3. 年忘れ会の計画と準備
12・26 （金）	グループ活動のふり返りをあたたかな人間関係のなかで行い、ふれ合う喜びを味わう	・みんなで行う年忘れの会	1. 会場設営 2. ウォーミングアップ 3. 年忘れ会の実施

・活動具体計画(例)

昭和61年12月26日(金)

主題名	みんなで行う 年忘れの会	ねらい	グループ活動のふり返りをあたたかな人間関係 の中で行い、ふれ合う喜びを味わう。お互いの違 いを認め合い尊重し合う	
活 動 の 流 れ			予想される問題点・留意点	備 考
1. 朝のあいさつ・お話 2. 会場設営・おやつづくり ・役割を確かめて作業に入る (1)会場の装飾・会場づくり (2)指人形の舞台設営 (3)おやつづくり ・飲みもの(お茶, 紅茶) ・カナッペウィッチ パン台, クラッカーの上にそれぞれ食 品を飾りつける ・ケーキを皿にのせる (4)その他準備 3. みんなで行う年忘れの会 司会: N子・T子 (1)開会のことば (2)室長先生の話 (3)乾杯……………おやつの開始 (4)人形劇の上演 ・創作劇 (監督: M子) ・シンデレラ (監督: N子) (5)年忘れしりとり歌合戦 (ビデオの観賞) (6)私の一言(お願いや感謝のことば) (7)閉会のことば 4. 後片付け, ふり返りを書く 5. 帰りのあいさつ			(第3プレイルーム, 日常生活ルー ムへ移動) ・男子グループ……会場設営 ・女子グループ……おやつづくり他 ・役割の分担の仕方, 仕事の量の差 については問わない ・持ち寄った食品を使って, カナッ ペウィッチをつくる ・出来, 不出来は二の次にして, 楽 しくむつまじう会を心がける ・この年の終わりにあたっての一言 を書いて交換し発表する。	紙の皿 パン クラッカ ー チーズ サラミ 卵 BGM
準 備	人形劇舞台, 各種指人形, カセットテープ おや用食品, 食器類, ビデオテープ等	活動場所	作業能力検査室 第3プレイルーム 日常生活ルーム	

資料4：メンバーのグループ参加状況（61.10.17～62.12.25）

昭和63年1月20日現在

No.	メンバー	第Ⅰ期			第Ⅱ期			第Ⅲ期					第Ⅳ期					備考									
		10月17日	10月28日	11月14日	11月25日	12月5日	12月26日	2月3日	2月17日	3月6日	3月17日	5月1日	5月15日	5月29日	6月12日	6月26日	7月3日		7月17日	9月18日	10月2日	10月23日	10月30日	11月6日	11月27日	12月11日	12月25日
1	T・K 中3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	63.3 卒業見込
2	Y・T 中2	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
3	K・T 中卒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	62.4より 定時制
4	K・N 中卒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	61.3 卒業 (自名)
5	R・H 中3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	63.3 卒業見込
6	T・H 中3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	留年 63.3 卒業見込
7	K・M 中3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
8	M・T 中2	○	(2回目から不参加)			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
9	T・Ko 中2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
10	A・Y 中3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
11	S・I 中卒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	62.3 卒
12	H・O 中2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	☆転校後順調に 登校している
13	N・M 中2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
14	Y・S 中3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
15	T・K 中3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	63.3 卒業見込
16	A・Hu 中1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
17	J・H 中3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

○……参加 ●……欠席 ☆……登校開始

おわりに

グループアプローチでの子どもたちの様子を思いおこしてみると、当初グループに参加した時の固い表情やおどおどした不安そうな眼は、今ではどの子にも見られない。

グループ活動も、2回、3回と回を重ねるたびに一人一人は互いに旧知の間からのようにグループにとけ込んでいるように見える。個々のふり返りや子担当者への話、あるいは母親の情報等からグループに参加した時の子どもたちの生の気持ちが伝わってくる。そのほとんどがグループ活動に対して肯定的に語られている。

やはり子どもたちは、仲間やグループを求めていたように思う。

子どもたちは同じ悩みをもつ仲間との交流体験を通して徐々に心を開き、自信を回復していった。

グループ活動のあとも仲間で出かけたり、電話をかけ合って遊びに出かけたりなど行動範囲もどんどん広がっていった。

グループアプローチでの体験が、彼らにとって有効に作用していることは確かな手応えとして感じられる。しかし、メンバーの一人一人にとって、グループ体験のもつ意味がどうであったのかは未だ十分に把握するには至っていない。今後実践していきながら、子ども個々の内観をとらえることで明らかにしていきたいと思う。

最後に、このグループアプローチを進めるにあたってご指導・ご助言くださいました諸先生方に厚くお礼申し上げます。

・引用文献

- 注1：真仁田 昭他「登校拒否児に対する治療の構造論的展開」筑波大学学校教育部教育相談研究
分野 教育相談研究第19集 1981年 1P
注2：小泉英二編著「登校拒否・その心理と治療」学事出版 1982年 155P

・参考文献

- 佐治守夫・神保信一編集「現代のエスプリ・登校拒否」至文堂 昭和54年
原野広太郎「教育学大全集34・教育相談」第一法規 昭和60年
多田治夫他「講座心理療法・集団心理療法」福村出版 1980年
村山正治「講座心理療法・エンカウンターグループ」福村出版 1982年
国分康孝「チームワークの心理学」講談社現代新書 昭和61年
国分康孝「カウンセリングの理論」誠信書房 昭和61年
神保信一他「登校拒否指導事例集」教育出版 1985年
安村重己「教育相談の実際」——登校拒否児とともに歩む—— 創元社 昭和58年
尾崎勝・西君子「カウンセリング・マインド」教育出版 1986年
和泉忠俊・金子靖著「教育相談」大成出版社 1973年
平井信義・他「教育相談ハンドブック」国土社 1969年
国分康孝「学校カウンセリング」誠信書房 1976年
国分康孝「カウンセリングの技法」誠信書房 1979年
木原孝博「カウンセリングマインドと教育活動」ぎょうせい 昭和61年

・指導助言者

横浜国立大学助教授	岡田 守弘先生	川崎市総合教育センター指導主事	木村 巖
早稲田大学教授	小泉 英二先生	川崎市教育委員会指導主事	松下 充孝
筑波大学講師	小玉 正博先生	川崎市総合教育センター指導主事	本間 千尋
川崎市立聾学校長	松本 光雄先生		
川崎市立南原小学校長	白井 節夫先生		